

シンポジウム 足利将軍・阿波公方の末裔 殉教者ディオゴ結城了雪神父の生涯



主催 カトリック高松教区

日時 2007年9月15日(土)

会場 徳島県郷土文化会館

シンポジウム

足利将軍・阿波公方の末裔
殉教者ディオゴ結城了雪神父の生涯

2007年9月15日（土）

開会式

【西川】 皆さん、大変お待たせいたしました。

本日、司会を務めさせていただきます西川康廣と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

では、ただいまよりシンポジウム「足利将軍・阿波公方の末裔 殉教者ディオゴ結城了雪神父の生涯」及び天正音楽のプログラムを開催いたします。

初めに、ディオゴ結城了雪神父の生まれ故郷、阿南のカトリック教会、バートラム・シルバー神父より歓迎の言葉をお願いいたします。

【シルバー】 皆さん、ようこそおいでくださり、ありがとうございます。

今日は阿南市をはじめ、徳島県民の私たちにとって大変喜ばしい日であります。阿南市生まれの殉教者ディオゴ結城了雪神父様の生涯をたたえる行事を行うからです。こうして、日本各地から集まってくださった皆様に、心から感謝申し上げます。

結城了雪の生涯をこうして語るができるのは、教会内外のたくさんの方の研究のおかげです。今日、そのうちの4名の方々は、シンポジウムを通してその成果をわかち合ってくださいます。また、宮崎市の中世音楽研究会が披露する歌を聞くことによつて、17世紀の教会の典礼の雰囲気も体験できることでしょう。

では、よろしくお願ひいたします。

【西川】 本日の行事のために、たくさんの方々が応援し、ご出席くださったことを心から感謝いたします。ご来賓として、大変お忙しい中、徳島市長代理及び阿南市長がご出席くださり、ごあいさつをしてくださいます。

それでは、徳島市長代理、第一副市長、錦野斌彦様、よろしくお願ひいたします。

【錦野】 皆さん、こんにちは。

私、徳島市の第一副市長の錦野でございます。原秀樹市長の代理として参りました。本日は、来年列福されますディオゴ結城了雪神父の列福を記念してのシンポジウムといたつたことで、ほんとうにうれしく思います。

皆さんご承知のとおり、結城了雪神父は、今からちょうど371年前に殉教されまして、来年、2008年に列福されるということでございます。そういったシンポジウムでございまして、私も今日のシンポジウムには心穏やかに参加させていただこうと思つております。

それでは、原市長からごあいさつの書面を言づかつてまいりましたので、私から皆さんにご紹介させていただきます。

『シンポジウム、足利将軍・阿波公方の末裔 殉教者ディオゴ結城了雪神父の生涯』がかくも盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。このたび、徳島にゆかりのあるディオゴ結城了雪神父が福者に列せられますことは、まことに喜ばしいこ

とであり、長年、列福運動を進めてこられた教会関係者並びに郷土史研究に携わる関係者の皆様方のお喜びもひとしおのことと存じ上げます。

徳島にゆかりのある列福者としましては、日本26聖人の1人として長崎で殉教し、後に聖人となられた聖パウロ三木が知られておりますが、以来、約380年ぶりに2人目の列福者であります。皆様方のこれまでのご尽力に心から敬意を表する次第でございます。

神父は徳島出身で、阿波公方の親族としか記録がなく、歴史にうずもれた存在でありましたが、最近のいろいろな研究で、古文書等からその出自が室町幕府13代将軍、足利義輝の親類に当たる結城喜太郎との説が有力となっております。先日も、神父の墓碑らしき名が刻まれた墓石が県内で発見されたとの報道もされておりました。今後のさらなる詳細な研究や、新たな発見が待たれるところでございます。

禁教令下の江戸時代初期、時代の荒波にもまれながらキリスト教の布教に人生を捧げ、近畿最後のキリスト教司祭として、信者を励まし、支え続け、幕府に捕えられ、過酷な拷問にも一切口を割らずに、巻き添えを出すこともなく、みずからの信仰を貫き通し、壮絶な殉教を遂げられた崇高な偉人が徳島で生まれ育ったということは、私たち徳島県人にとっても驚きであり、郷土の誇りでもございます。

物質的な豊かさに恵まれる一方で、精神的なゆとりや心の豊かさ、よりどころがより一層求められる今日であります。苦境の中にあっても信仰を貫き通した神父の生涯は実に精神的に充足されたものであったのではないのでしょうか。本日のシンポジウムがディオゴ結城了雪神父の生涯をしのび、現代に生きる私たちに人間の崇高さを再認識させてくれますことを心からご期待申し上げます。

最後になりましたが、関係者の方々並びにご参会の皆様方のますますのご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げまして、ごあいさつといたします。

平成19年9月15日 徳島市長 原秀樹

代読させていただきました。

どうぞ、いい会でありますように心からお祈りいたします。

【西川】 次に、阿南市長、岩浅嘉仁様、お願いいたします。

【岩浅】 皆様、こんにちは。徳島県阿南市長の岩浅嘉仁でございます。

ごあいさつが続きますが、お許しをいただきたいと思います。

本日、ディオゴ結城了雪神父の生涯のシンポジウム、皆様方とともに出席できましたことを大変うれしく思っております。シンポジウムの表題にございますように、結城神父は阿波公方の末裔でございますが、ここで私のほうから簡単に阿波公方についてご紹介をいたしたいと思っております。

時は応仁の乱の後、下克上の風潮みなぎり、将軍の権威が地に落ちた室町時代後期、政治の腐敗を嘆き、撫養岡崎、現在の徳島県鳴門市撫養町岡崎でありますけれども、そこで病死した第10代将軍、足利義種の養子、義冬は父の悲願を果たすために上洛を

しましたが、戦いに敗れ、阿波の守護、細川家に迎えられ、阿波の国平島庄、現在の私どもの阿南市那賀川町に落ち着きました。この足利義冬こそが初代の阿波公方と呼ばれた人で、那賀川町はその後9代、約270年にわたり阿波公方の上洛絵巻の舞台となりました。

その後期には、公方が過ごした平島館に多くの軍人が出入りし、阿波の国南方地域における漢文学の中心地となるなど、文化学術面で大きな影響を与えたと言われております。また、那賀川町の西光寺境内には、足利10代将軍義種をはじめ、歴代公方の墓石を残し、民間に幾多の伝承を伝えて、往年の面影をしのばせております。

さて、結城神父に関する資料は乏しく、その出自についても謎に包まれておりましたが、旧那賀川町史編纂室が発見した資料や、民間の研究者の熱心な調査によりますと、結城神父は第13代将軍足利義輝の弟の孫、阿波公方でいいますと3代公方義種の妻の兄でございます。結城喜太郎であるということがわかりましたので、阿南市出身である可能性が極めて高くなったと存じます。

阿南市におきましては、今年の秋、国民文化祭の一環といたしまして足利サミット、足利家にゆかりのある全国60団体、足利市とか鎌倉市とか、さまざまな自治体がありますけれども、足利サミットというものを阿南市那賀川町で11月2日に開催をいたします。そして、久しぶりに薪能も復活させたいと考えております。私ども阿南市民は偉大な先人、すばらしい偉人が私たちのふるさとから生まれたということに誇りを持って、8万市民の今後の糧として歩んでまいりたいと決意を新たにいたしております。

今日のシンポジウムが大変有意義で、盛会裏に終了されますことを祈念いたしまして、ディオゴ結城の出身地、徳島県阿南市長としてのごあいさつにかえさせていただきます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

シンポジウム

「浄土真宗の講とキリシタン時代の組について」

川村信三師

【西川】 それでは、本日のプログラムの中心であるシンポジウムを始めます。

プログラムに記載されている内容のとおり、パネリスト川村信三師、結城了悟師、板東英雄師の発表の後、溝部脩師の司会でシンポジウムの内容が展開していきます。どうぞ皆さん、拍手でお迎えください。

【溝部】 それでは、今日のシンポジウムを開始いたします。

まず、20分ずつ3人の方に問題提起をしていただいて、お休みをしてから後、それについての話し合い、質疑応答という形でシンポジウムを続けていくことにいたします。

今回の結城了雪のシンポジウムに際して、今、中世音楽の歌が披露されましたけれども、400年前のカトリック教会と今のカトリック教会がどういうふうにつながっているのか、昔の歴史を思い起こすことで、現代の私たちに何を伝えているのか、こんなことを、400年前と現代とをいつも比較対照をしながら、この2時間をご一緒に過ごしていきたいと願っております。

それでは、まず第1番目に、川村信三先生のほうから「浄土真宗の講とキリシタン時代の組について」というお話をお願いいたします。

【川村】 皆さん、こんにちは。上智大学から参りました川村と申します。

私は、今日、結城了雪神父というシンポジウムのテーマに絞ってお話をされる先生方の前に、一度キリシタン時代というものについて皆さんに、少し大きな枠からお話ししたいと思っています。

この背景、結城了雪を含め、188人の殉教者がこのたび列福されるというニュースを皆さんご存じだと思いますけれども、キリシタン時代の教会をつくった信徒、いわゆる一般の信者の方々は一体どのようにその歴史をつくられたのでしょうか。そういうことを皆さんと考えていきたいと思っています。

まず最初に、統計上のお話を少しさせていただきたいんですけども、1592年にイエズス会の宣教師が報告書を書いております。その中で、キリシタンの人口は約22万5,000人であると言っています。そして、200カ所ぐらいの共同体に分かれて、それぞれ各地の共同体が活動していたというんですけども、それでは、皆さんにクイズです。22万5,000人に対し、聖職者といわれる神父は一体何人ぐらいいたかということです。どれぐらいの数がいたと思われますか。

実は40名なんです。ということは、簡単に単純計算をしましても、5,200人に1人ぐ

らしい割合でしか指導者がいなかったんですね。ちなみに、現代のカトリック教会、司祭が少ない、少ないと言われるんですけども、実は1,520人の司祭がいます。40万人のカトリック信者に対して1,500人ですから、割合としましたら、288人に1人の司祭がいる。それぐらいの違いがあった。キリシタン時代には、実に指導者が少なく、信徒たちだけで200カ所、自分たちの共同体を守っていた、そんな図が見えてきます。

じゃあ、どういうふうにしたんでしょうか。それぞれの共同体は別々の工夫によって共同体を運営していたのでしょうか。ところが、何と彼らは全く同じような組織をつくっていました。その大もとにありましたのが、コンフラリア。皆さん、聞いたことがおありでしょうか。コンフラリアという信徒だけの組織ですね、これはヨーロッパ起源ですけども、信徒の集まりの組織のシステムを利用していました。

どんなことかと申しますと、これは14世紀あたりのヨーロッパではやったんですけども、50人ぐらいのグループが司祭、指導者を全くなしに、信徒だけで共同体を運営しようと。50名から100名ぐらいの団体だったのでしょうか、その中には規則も持っていました。誰が入会するか、誰が退会するかも決めていました。

それから、選挙でリーダーを選んでいました。リーダーは50人に対し、5人から10人ぐらいですね。そんなグループ、いわゆるコンフラリアというものをヨーロッパでは各地につくりました。

その共同体は、14世紀に黒死病がはやったとき、教会共同体の人口ががたがたと減り、司祭もたくさん亡くなったんですけども、その危機を乗り越えるために、彼らはグループで活動していました。ある人たちは慈善活動をしていました。ある人たちはご葬儀の手伝いをしていました。貧しい人たちに対して、寄附を集めて、分けていました。そういう慈善活動もしていた。

そんなグループの組織づくりを、そっくりそのまま豊後というところに移入しました。もちろん、その当時の宣教師たちは、今のような立派な教会をつくったり、司教様がいて小教区をつくるなんていう発想はありませんでしたから、まずグループをつくったわけです。50人から100人ぐらいのグループ、これが教会共同体でした。こういう共同体のつくり方は全国に模倣されました。ですから、全国200カ所、別々にあった共同体が大体同じような形で運営できたんですね。

例えば、民家に祭壇を置いて、そこへ1週間に一遍ぐらい集まってくる。一緒に祈りをする、ロザリオの会ででしょうか、あるいは何かを一緒にする。それから、同僚たちがカテキズム、キリストの教義を教え合ってきた。そして、時々神父が回ってきて、その共同体にミサをし、赦しの秘跡を聞いて、また去っていく、そんな図式でした。したがって、そういう共同体が各地にできたわけです。

16世紀というのは、そういうキリシタンが30万人にもなったというのは1つの驚きでありますけれども、実は、そういうしっかりとした共同体のつくり方を持っており

ました。

一方、今日のテーマであります、日本人がなぜそういうものを受け入れたかということですが、実は、同じような共同体づくりが既に日本には存在しております。ここの表題に掲げました、浄土真宗の本願寺派は、いわゆる講というものをつくりますね。ご存じでしょうか、村人たちが道場を中心として念仏の会をつくったわけですが、全く同じような組織が反映しています。

キリシタンは、もちろんその人たちに倣ったわけではありませんけれども、全く同じような組織づくりが残っていました。道場です。各村に1つの仏壇を置きまして、そこに阿弥陀像を置いて、みんながそこに通ってくる。そこに集う農民たちを指導するのは、やはり農民代表ですね。毛坊主なんていう言い方が時々されますけれども、専門の僧侶ではありません。プロフェッショナルの僧ではなくて、読み書きができるような農民代表がその道場を守っています。そして、やってきた人々に対していろいろな教を談義本というものを使って教えたりしていました。

そんな共同体づくり、キリシタンの共同体とパラレルに見えます。よく似ています。お互いにまねをし合ったわけではないのですけれども、非常によく似ています。そんな組織づくりがあったからこそ、キリシタンはキリシタンで30万人の信徒数を抱えるようになりまして、浄土真宗は本願寺のネットワークとあって、大坂（現・大阪）の石山にありました本願寺の、全国に広がるネットワーク網を持ちました。

それがいずれ、織田信長あるいは豊臣秀吉によって、危険視されたということは事実だと思いますけれども、とにかく、こんな組織づくりの中で、信徒たちは自分たちの信仰を守る組織を持っておりました。これは非常にすごいことだと思います。

では、16世紀の共同体、この2つの宗教が全く別々に同じような組織を持っていたという背景、共通の要因は一体何かといろいろ考えてみますと、非常におもしろいことが浮かび上がってまいりました。と申しますのは、15世紀、先ほど阿波公方の話がありましたけれども、室町幕府が完全に衰退していく15世紀末から16世紀にかけて、実は、この2つの宗教の講、あるいはキリシタンの組織はどんどん大きくなります。

なぜでしょうか。中央政府はどんどん衰退していくのに、地方のキリシタンの組織とか浄土真宗の組織はどんどん強くなっている。なぜでしょうか。本来ならば両方もだめになるか、両方ともよくなるのが普通なのですが、中央はだんだん弱る、地方はだんだん強くなる。

なぜだろうかということ考えたときに、15世紀というのは、実は飢饉の時代です。気候が悪くて作物がとれず、農民たちはいつも飢饉という農村の荒廃に悩んでおりました。そのとき、どうやったらこの危機を乗り越えられるかと考えたときに、それまで村はばらばらに存立していたのですけれども、一緒になって、共同でこの危機を乗り越えようじゃないかと。今までは、田んぼに水を引くときに村と村は争っていたけれども、それはやめましょう、一緒になって灌漑用水をつくりましょうと、いろいろ

考えていきました。集村というものになっていき、だんだん大きくなっていきます。

村は、自分たちのサバイバル、生存を自分たちで頑張っつくりしようとしました。惣村（そうそん）という村づくりが始まりまして、そして、みんなでこの危機を乗り越えようじゃないかというときに、キリシタンが持ち込んだ共同体づくり、あるいは本願寺がつくりようとした共同体のモデルが非常に人々を助けたんですね。みんなは、これだということになったと思います。

しかも、この2つの教えは非常に似ているところがあります。それは、どちらも八百万の神ではない、信仰の対象は1つだけです。片や浄土真宗は阿弥陀仏一仏、キリスト教はもちろんデウスの一神教です。すなわち、人々が一緒になろうといったときに、ばらばらの心では全く統一がとれません、イデオロギー的に——イデオロギーという言い方は正しいかどうかわかりませんが、思想的に同じ考え方。他の崇り神とか、はやり神とか、祖先神とかに縛られることなく、1つの信仰だけでいいと言われたときに、彼らの結束は非常に固かったと思います。

それに対して、秀吉たち為政者の人間たちは、それを非常に危険視した。ただの農民の集まりではないわけです。心から一緒になる統一ができています。死んでも同じであるという、この思想ほど強い結束を生んだものはなかったと思います。そんなところで2つの宗教が16世紀の後半には非常に大きな力となりました。

これは、単にキリシタンの教えが魅力的であったとか、浄土真宗の教えが魅力的であったという以上に、その背景を考えれば、この時代のことがよく見えてくると思います。農民あるいは一般の人々が一緒になって信仰を守ろうとした。その中に、今回の188人の殉教者たちが生まれました。

結城了雪師のことを私はあまりよく知りませんが、後で先生方がおっしゃると思いますけれども、何か突然捕えられましたね。そのとき、彼はかなりの間、放浪していたと言っています。放浪していたというよりは、多分、この信徒集団が密かに支えていたのだと思います。それを結城了雪は一切公言しませんでした。どこで誰に助けってもらったかとか、そういうことは一切言いませんでしたが、彼を守ったのは確かに信徒だったと思います。

こんな16世紀の教会、キリシタン、あるいは宗教に心を一致させた時代の背景というのをとらえていくと、やはり私たちは何か大きな聖霊の働きといいますか、流れを感じざるを得ない、そんな気がいたします。補足は質問のあったときにしたいと思いますが、とにかく16世紀のキリシタンの教会は信徒の教会だった、これが私の言いたい第1のポイントです。

以上です。

【溝部】 どうもありがとうございました。

第1のテーマがあったと思うんですね。すなわち、今、私たちは小教区とか教区とか、こういう制度の教会を考えますけれども、キリシタン時代は信徒の共同体のどこ

ろに神父が行っていた。基本的には、信徒が教会をつくって全国のネットワークを持っていたこと、これは日本の浄土真宗の土壌の中では当然のように受け入れられていた、日本人には抵抗がなかった組織であるということを今、言われたと思います。

【溝部】 この次は、逆に、結城了雪神父に直接入っていきたいと思います。

結城神父様、よろしく願いいたします。

【結城】 皆さん、こんにちは。

私からは、結城了雪の靈性について話すようにということでした。靈性というのはちょっと抽象的な言葉ですけれども、私はこのように考えました。結城了雪は他人のために生きた人だと。そこに彼の心を見ることができると思います。

今から30年前、結城了雪という人はあまり知られていませんでした。自分のふるさとでもそうでしたが、今は日本だけではなく、外国でもよく知られています。

彼の生涯について、2つの光がそれを照らしています。1つの光は、宣教師の記録です。1604年から1623年まで、15回にわたってローマに送られた宣教師の名簿があります。そこには、阿波国出身の彼の名前が載っています。また、ほかの宣教師の手紙が残っていて、毎年、宣教師の活躍ぶりをローマに報告していたことがわかります。

そして2つ目の光は、結城了雪本人が書いた3通の手紙です。彼は12歳のとき洗礼を受けたらしいのですが、それがいつであるのか正確にはわかっていません。

彼が12歳のとき、大坂（現・大阪）にあった安土のセミナリオに入りましたけれども、長くいることはできませんでした。1年後、豊臣秀吉が禁教令を出したのです。五畿内の宣教師全員が2隻の船に乗せられて、堺の港から平戸に送られました。その宣教師の中には、ザビエルから洗礼を受けた琵琶法師のイルマン（修道士）ロレンソもいました。最初の旅は室津まで、そこは小西隆佐の領地がありました。後に、8月の静かな海を通して、平戸に向います。ここで1つの大切な出来事がありました。

私は昨日、福岡からここへ来る飛行機で瀬戸内海の島々を見ましたが、かれらが立ち寄ったのがどの島であったかはわかりません。どこか港に着く前、ある無人島に船を上げ、宣教師が一緒になって夜の祈りを唱えました。サルベレジナ、聖母マリアの歌を歌ったのでしょう。

当時の習慣では、お祈りはラテン語でした。けれども日本には美しい翻訳がありました。キリシタン文学の父と呼ばれるパウロ養方の翻訳です。「流人となるエバの子ども、御身へ叫び奉る。この涙の谷にてうめき泣きて、御身に願いをかけ奉る」。結城了雪、まだ了雪とはいいませんでしたが、少しずつ迫害が身に迫っていました。

平戸の生月へ送られますが、宣教師は日本から出ませんでした。セミナリオの生徒は長崎に送られました。生月から長崎に行くとき、平戸港の前を通りますが、そこにはドミンゴス・モンテール、ポルトガル人の大きな船が錨をおろしていました。宣教師たちはその船で帰るはずでした。しかし彼らはその船に乗らず、秀吉に背いて潜伏

宣教師になったのです。

長崎でミゼリコルディア（慈悲の組）の本部で宿を受け、そこで有馬のセミナリオの生徒と合流しました。セミナリオは、今で言えば中学・高等学校です。けれども、セミナリオの教育は、キリストの言葉に基づくものでした。

イエズス様は弟子にこうおっしゃいました。「私は仕えられるためではなく、仕えるために、また、たくさんの人のために命を捧げるために来た」。仕える心を学ぶ。それと同時に、セミナリオではコミュニケーション（共同体）をよく学ばなければなりません。イエズス様のメッセージを伝えるために、ラテン語を勉強しました。また、人間の心を磨くため、美しいメッセージを伝えるために、美術や音楽も学んでいました。結城了雪は、とても優秀な生徒だったようです。ローマに送られる宣教師の手紙には、彼の活躍が書かれています。日本語で上手に説教をする日本人、日本文化をよく知っていること。

セミナリオを修了すると、了雪はマカオに送られます。中浦ジュリアン、伊東マンショ、アントニオ石田、彼より四、五年上の先輩たちと一緒にいました。すなわち、彼は大幅に進んでいたわけですから。ヴァリナーノ神父が、日本では迫害があるということで、彼らは3年間、マカオで神学を学びました。学問を磨くことだけでなく、そして外国から来る宣教師と一緒に勉強して、心を合わせて、後でともに働くことができるように、国際的な心を育てなければなりません。この点でも、結城了雪はペトロ岐部、中浦ジュリアンと同じように、純粋な国際人でした。

同時に、彼は自分の文化をよく知っていました。ある古本屋には、彼がセミナリオで教えるときにつくった孔子の論語集がありますが、彼のサインが残っています。彼は日本の文化、中国の古典も勉強していました。同時に、開かれた心を持っていました。日本は鎖国に傾いていきますが、彼らは全世界に心を開いていました。閉じられていこうとする国で、自分の国民のために働こうとしていたのです。

彼の心を一番きれいに示すのは、彼について書かれた2つの手紙です。最初の手紙は、彼が1614年マニラに追放されて、そこで1615年に司祭になったとき、イエズス会のレデスマ管区長はこのように結城了雪を紹介しています。「結城了雪神父、実直な人、仕事が熱心で、日本人の間で成果を上げて、感化を与えました。数日前に日本に戻りました」。言葉は短いけれども、すばらしい内容です。

そして、その若い司祭、結城了雪はローマにいるイエズス会の総長に長い手紙を送っています。珍しいことに、その手紙では自分について一言も書いていません。そのかわり、3つの問題を取り扱っています。

まず第1に、自分がセミナリオにいたときに知っていた人の殉教。総長に「喜んでください、日本の教会はこんなすばらしい模範を与えています」と書いています。2番目には、日本の暗い雰囲気。追放の関係で、司教も亡くなり、司教代理の問題について、宣教師の間に争いがあったこと。教会が分裂していたこと。結城は、それらに

苦しみ、強く悲観していました。そして、総長にこういう言葉を書いています。「日本へ働きに来る宣教師は、ただ優しい心、いい目的で来るのでは足りません。判断力がある人、ほんとうによく考える人でなければなりません」。この若い神父が、総長に助言を与えているのです。

3番目には、自分の心にあった、若い日本人、イルマンたちの教育のことです。日本から追い出されてマカオに行ったときにセミナリオが崩れた。マニラにセミナリオをつくってくださいと総長に書き送っています。今、日本語で教えることのできる人間がここにいて、そして自分の言葉で神学を学べば、もっと深く理解することができると。非常に進歩的な考え方です。自分の言葉で神学を勉強するようになったのは、今から30年、40年前のことです。私もラテン語で神学を勉強しなければなりませんでした。結城了雪は非常に進歩的です。けれども、結果を待たないで日本に戻ることに なります。

そして、彼の性格をあらわすもう1つの事実があります。宣教の初めに、まずふるさとに戻り、兄の兵庫の家に泊まり、彼に洗礼を受けています。洗礼名はジュアン。足利義種と結婚している妹、祐賀にも洗礼を受けています。そして祐賀の子どもたち、数人のいとこ、家来に洗礼を受けて、自分の任命されたところ、京都に向います。

あ のとき京都に送られる宣教師は、一番活発な人でありました。1616年、京都に入り、1617年には大きな旅をします。というのは、徳川家康は京都の教会のリーダーたちを津軽に追放して、重たい労働をさせていました。結城了雪はいろいろな関所を越え、危険を冒して津軽まで行き、牢屋に捕えられている人の告白を聞いて、ご聖体を授けました。そして京都に戻っています。

1619年には京都大殉教と呼ばれるものが起こります。了雪がマカオで一緒に勉強したポルトガル人、ベント・フェルナンデス、彼も後に殉教していますが、フェルナンデスと一緒に信者を励まし、牢屋にいる人を見舞い、殉教した信者たちの遺体を埋めました。

次の旅は1620年で、阿波の国に戻ります。津の国、丹波、若狭、紀の国、そして京都へ。3番目の旅は1621年、6つの国に行っています。京都ではもう1人になりました。ベント・フェルナンデスは長崎に呼ばれています。

そして、記録されている最後の旅は1625年、蝦夷へ行っています。蝦夷で活躍し、蝦夷から沼田を通して、山を越えて日本海を渡り、佐渡へ渡り、そこでも洗礼を受けています。佐渡から帰って、金沢、そして京都。行くときには10の国を通して宣教し、帰るときには8の国を通ったと手紙に書いています。

ちょうどその年の12月、ローマに短い手紙を送っています。ほかの宣教師、残る人はどこにいるか、誰が亡くなったかを説明しています。自分については1行だけです。

「私は元気で働いています」。これが結城了雪です。他人に心を開き、他人のことを褒めます。けれども、自分のあの長い旅のことは一言も書いていません。

このような働きをしました。阿波から追放された親戚、友だちが信仰に戻り、彼に協力することもありました。岡本という人が、壱岐の国と四国をつなぐ渡り船を持っていました。勘兵衛ほかの義理の弟たちが彼を手伝っていました。

あの時代、日本にはすぐれた人物がいろいろいました。一番知られているのは、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、キリシタン大名如水たちでしょう。結城了雪は、彼らと同じようにすぐれた人物です。けれども、彼がほかと違ったのは、決して武器を持たないことでした。決して、人を切ったことがありません。善を行って、みんなをおさめています。倒れた信者を立て直しています。新しい人に洗礼を授けて、いろいろな危険の中で、1616年から殺される1636年まで、その仕事を続けました。

私はこの模範を見て、バチカン公会議のある言葉を思い出しました。バチカン公会議は2カ所で同じ言葉を繰り返しています。「教会が福音を宣教することによって、人々の心や考えの中、あるいは各国民の固有の風習や文化の中に見出されるよきものすべてが滅びないように計らうばかりではなく、神の栄光、悪魔の狼狽、人間の幸福のためにそれを清め、完成させるようにする」。(「教会憲章」2章17、「教会の宣教」2章9) 結城了雪の生涯は、このことに捧げられていたと思います。

ここで彼の生涯を終ります。ただ、亡くなるときまで彼が大切にしていた記録があります。当時、捕えられたキリシタンは長崎奉行の支配下にありました。結城了雪が捕えられたとき、長崎奉行は大坂の奉行に任せました。長崎の奉行所から役人が送られてきて、了雪の殉教のとき、そばにいました。長崎で沢野忠庵(フェレイラ)が転んだときも、この役人に任せられました。彼の務めは、神父を転ばせることだったのです。

彼が長崎に帰ったとき、ポルトガル人の通訳にこう言っています。「結城了雪は穴吊りの責めで亡くなった。自分の宿主は誰であったかを尋ねられたとき、『宿主はない、いつも森に住んでいたと答えた。私は誰にも迷惑をかけなかった』と言った。結城了雪は、最後までそういう人物であった」。

【溝部】 結城神父さん、どうもありがとうございます。

結城神父さんの霊性というのは、人のために生きた生涯であるということ。そのために、日本人として日本の文化をよく理解した。外国の宣教師たちとも交わることができる、普遍的、国際的な教育を受けて、基本は、人間として、キリスト者として自分の信仰に生きる道を選びとおした。それは、最初に受けた教育が、仕える生涯なんだということを述べられたと思います。

私も、神学、哲学をすべてラテン語で勉強しまして、ラテン語で試験を受け、論文も書いておりますから、結城神父さんと同じ世代の最後のほうです。私の次の世代は全部、日本語に変えられているんですね。今考えますと、やはり日本語で神学を勉強していたら、今よりはずっとわかりがいいのではないかなと思ったりもしております。

400年前にこんなことを考えたというのは、すばらしい神父だったなと思います。

【溝部】 それでは、3番目のパネリストに徳島のこと、四国のこと。30年前にはほとんど結城了雪について知られていなかったと結城神父さんがおっしゃいましたけれども、ほんとうに知られていなかった。それが、近年とても脚光を浴びるようになったのは、郷土の人たちとつながって結城神父というのがわかってきた、ここで脚光を浴びてきたということになります。

ここでは徳島文書ということも踏まえた上で、板東先生にお話をお願いしたいと思います。

【板東】 失礼いたします。

私のほうからは「徳島文書と結城了雪」ということで少しお話をさせていただきたいと思います。

初めに、結城了雪に入ります前に、今までの郷土史研究、キリシタン研究の中で、徳島のキリシタンのことが大分わかってまいりましたので、そのあたりのことを紹介させていただいて、それから了雪さんのことに入らせていただきたいと思います。

キリスト教が徳島へ伝播してきたのは、正確な資料がいまだにつかめなくて、細川・三好の時代に都で非常に活躍しているときに、その流れの中で都から入ってきただろうということはよく言われているのですが、それについての資料的な裏づけといえますか、研究についての分野はまだ進んでおりません。ただ、そういう状況の中で、2、3の資料から、徳島にキリスト教が広まっていったということは推測できます。

例えば、江戸時代初期ですが、1643年にローマで宣教師のガルディンという方が作成しました日本の布教地図というのがございます。「日本布教分布図」これはイエズス会の分布図だと思うのですが、この中に、阿波に教会があるという記述が出てきます。これは徳島県の歴史写真集に写真入りで紹介されているんですけども、どの程度の布教が行われ、あるいは信仰が広がっていたのかはわかりませんが、ともかく、信仰の母体のようなものが少し根づいていた兆しはあったのではないかと思います。

そういうふうに、初期の布教の状況はほとんどわからないのですが、江戸時代に入りましてキリシタン弾圧が激しくなってきましたと、たくさんの文書の中にキリシタン弾圧のことが出てまいります。

今からお話しします結城了雪さんにつきましてもわかってくるわけですが、現在、徳島の庄屋さんの文書とか、『蜂須賀家文書』などから洗い出してみますと、約38名のキリシタン、もしくは転んだキリシタンの方がいらっしゃいます。その人たちに関しまして、特に『蜂須賀家文書』の中に、公儀に提出しました書類がございます。タイトルは「転切支丹類族御届一卷」、ちょっと硬いタイトルですけども、これを見てみ

ますと、少し時代は下りますが、寛政年間、このとき徳島には18の転びキリシタンの家系があると報告されています。

ところが、この18の家系のうちの12の家系については、資料の中の文面で言いますと「右の類族、前々は数多く御座候えども、追々死絶、ただいま御座なく候」と書いてありまして、12の家系は断絶というふうになっております。6家はつながっておりまして、その1つが平島公方、祐賀さん。今からお話しするところのディオゴ結城さんにつながっていく家系であります。

滅んでいった家系の1つに、板野のほうに東意という転びキリシタンの家系があるんですけども、『庄屋家文書』の中でそれを調べていきますと、その東意の子どもから孫、それから曾孫と、ずっとわかってまいります。明和5年と書いてありますが、1758年の段階で曾孫が15名ほどいらっしゃいます。ところが15名いた東意一族は、それから30年たった寛政年間の『類族御届一卷』の中では家が絶えておるというふうに書いてあるんですね。15名もいた子どもたちの家系がほんとうに絶えるのだろうかという疑問が出てくるのですが、そういうことが記載されております。

これは、ある意味で、厳しい取り扱いがされていたのではないだろうかということ推測させるのですが、そういう文書から、最近、徳島県のキリシタンの状況もわかってくるようになってまいりました。

導入が長くなってしまいましたが、そういう中で、今言いました『転切支丹類族御届一卷』の中でも把握されています祐賀という方、平島家の方です。その祐賀等について少し紹介させていただきますと、実はこの祐賀を通じまして、ディオゴ結城さんの話が出てまいります。

この祐賀という方は、3代平島公方義種の奥さんで、そして3歳のとき水無瀬家に養女に参りまして、13歳で平島家に嫁いでおります。こういう流れを持っている方ですけども、その祐賀さんがキリシタンであるということで2回ほど大きく取り調べを受けております。

まず初めは、1635年に長崎奉行の榊原飛騨守、それから仙石大和守という2人の奉行と下役人が「不慶伴天連」を探しにやっております。この「不慶伴天連」というのが、実はディオゴ結城さんだと現在言われているのですが、彼を探しにまいります。そのとき、讃岐にやってくるのですが、讃岐には祐賀さんの娘——「飛め」と書いてありますが、飛めさんと、その主人であります豊嶋五郎右衛門という方がいらっしゃいますが、その人たちに長崎奉行から不慶の行方について知らないということが起こってまいります。

これに対しまして『荒井家文書』の資料を見ますと、豊嶋五郎右衛門は、私は知らないと述べています。しかし、そのことについて資料には「阿州於平島又八郎母、祐賀、不慶妹にて御座候」。阿州（阿波）にいる平島又八郎の母、祐賀は不慶の妹であると記されています。だから、そちらのほうに尋ねたらわかるのではないかと、そうい

う文面を残しております。

資料では、その後すぐに、奉行たちは平島のほうに行く手はずになっていたようですが、急きょ本州の備前（岡山）に出ていくということになり、その後、奉行が調べに来たという事柄が豊嶋五郎右衛門から平島家へ報告されています。

報告を受けた平島家のほうは、荒井門内、この方は祐賀のおいに当たる方で、さらに家臣にもなりますが、その方を通じて、いろいろと手だてを考えています。その結果、荒井門内はそれを受けて、奉行とともに紀州へ行きまして、そこで、かつて自分の配下におりました岡藤左衛門、さらに勘兵衛という人たちと出会いまして、この神父（不慶伴天連）を捕まえるに至るという経過が書かれています。

この不慶伴天連、それがディオゴ結城さんであるという資料につきましては、最近の研究の中で大分明らかにされてまいりました。ここにあるのですが、三木さんが小さな冊子の中で、まずディオゴ結城さんと不慶は一体ではないだろうか、また、その呼び方についてもいろいろ検証されておりまして、その方向で大体、でき上がっているように思います。

それから、今お話ししました荒井家についての話ですけれども、その資料につきましては、今年5月に刊行されました『平島家家臣荒井家文書』というのがございます。古文書を読む会のメンバー、谷本さんを中心とする方々がこれを読解されまして、状況が克明にわかってまいりました。

私自身も、実は17、8年前、祐賀についての論文を発表させていただいたんですけども、そのときには、まだこれだけの正確な資料がなくて、少し欠落していたところもありましたが、この資料を見せていただきまして、ある意味で確信を得るようなところが多々ございました。県下ではそういった資料がたくさん出ておりますので、また目を通していただけたら、その現状がよくわかるのではないかと思います。

話が少し飛びましたが、そういう状況の中で、不慶すなわちディオゴ結城師は捕まるという状況になってしまいます。後の書類につきましては、了悟先生の、五畿内の最後の宣教師の中に詳しく紹介がありましたけれども、穴吊りの刑という形で亡くなっていくということがわかっております。

ディオゴ結城師についてはそこまでしかわからないのですが、実はそれに関係する中から、キリシタンに対してのさまざまな取り扱いのことがわかってまいります。

まず、豊嶋五郎右衛門、これは先ほど言いましたように、初めに長崎奉行が訪ねてきた人ですけれども、資料によりますと、彼はそのとき「伴天連れうこ、姪舅に候ゆえ召籠を置かれ候」。根拠がはっきりしないにもかかわらず、彼は牢屋に閉じ込められるという記載があります。その後、ディオゴ結城師が捕まりまして、その後の資料を見てみますと、豊嶋五郎右衛門が才覚をもって右、伴天連を捕らえたと。これによって「被成御赦免候」、ご赦免になったということが記されております。

ただ、ご赦免にはなっているのですが、その後を見てみますと、決して自由の身に

なったわけではない。「番之者」をつけられて、監視されながら生きてくという一面も記されております。こういうふうには、ある意味では非常に厳しい取り扱いがなされていることがわかります。

それから、その後の祐賀につきましては、「祐賀様の儀は少しも苦しからず候」と、これは長崎奉行配下の太田久右衛門、西嶋六大夫、この方から豊嶋五郎右衛門に渡された文面の中に、祐賀に対しては、とりたてて処分はないという文面が入っております。

このように、一度目の嫌疑の中でディオゴ結城師が逮捕され、そして殉教し、祐賀、豊嶋五郎右衛門につきましてはお構いなしという形で、とりあえず一たんは終わっております。

ところが、それから12年ぐらいたちまして、大坂でまた訴えがあります。その訴えは、不慶伴天連の姪とか妹であるという内容で、すなわちディオゴ結城師の姪・妹であるということで取り調べがスタートしております。

それを紹介しますと、正保3年、1646年6月に、大坂におきまして本屋忠三郎という人が自白をしております。資料を読ませていただきますと、「大坂北新町本屋忠三郎自白、不慶伴天連妹、年六十六、七、名前は祐賀。十三年以前まで切支丹宗門にて御座候。ただいま阿波南方平島と申すところにまかりあり候」こういうふうには訴えております。

不慶の妹であり、キリシタンであるとの訴は、幕府の宗門改、井上筑後守から藩に届けられるわけですが、それを受けまして、藩では、阿南地方の支配に当たっております加島主水を中心として探索が行われます。その結果、祐賀の取り調べが始まるのですが、祐賀の申し開き状を見ますと、こういうふうには書いてあります。「不慶の勧めによって私とせがれの分右衛門、それから兵庫、娘、その人たちが密かに洗礼を受けました」。

洗礼を受けてから2、3年して、平島家にキリシタンがいる、探索をしろというふうには家政から命令があつて、加島主水を中心として探索をしました。その結果、洗礼を受けた人たちの存在が明らかになってきた。そうすると、家政からは、キリスト教は厳禁である、だから厳罰にしなければならない。ただし、転び、そして誓詞を出すならばよろしいということになりまして、結果的には転び、そして誓詞を出すという形で終わっております。

ただし、男でありますせがれの分右衛門と家来数名は所払いであるといつて、追放されております。さらに、祐賀と祐賀の娘につきましては、真言宗の西光寺の檀家にするということで折り合いをつけております。

なお、その中でも不慶について触れているところがありまして、帰郷してから不慶とは二度と会っておりませんということ。それから、キリシタンの嫌疑については、豊嶋五郎右衛門が不慶を探索に来たときに、老中からもらった書類があり、それによ

って私の身は潔白であると述べています。ところが、この申し開きはすんなりと通らないんですね。

どうなったかといいますと、井上筑後守、つまり公儀宗門奉行から、大坂へ行って、そこで訴人と対決をなささいという内容になります。その結果、その年の12月に大坂に渡りまして、大坂町奉行の久貝因幡守の指示で詮議を受けております。

最終的には白黒つかなかったようですけれども、その結果、国もとへ召し連れ、そして国もとに預けるという処置となっております。さらに、不慶との関係の中で、豊嶋五郎右衛門も取り調べを受けています。先ほど言いましたが、豊嶋五郎右衛門は監視の目を受けて生きていたわけですが、彼についても訴えているのです。

その資料を紹介させていただきますと、6月の本屋忠三郎の自白によると「祐賀の婿の豊嶋五郎右衛門、年は五十八、九である。同女房、四十三年。右、五郎右衛門夫婦は十三年以前まで切支丹宗門にて候。その後、転び候や存ぜず。五郎右衛門の女房は不慶伴天連姪にて御座候」。こういうふうには、不慶の姪であるということで、また訴えられております。

これについて、五郎右衛門のほうは、私はキリシタンになっていないし、不慶の逮捕のときに老中から書類をもらって身の潔白は証明されていると言ひ、その主張は認められまして、彼は一応、解放となっております。ただ、女房、飛めについては、そうすんなりとはいかなくて、不慶の勧めによってキリシタンになった、しかし29年ぐらい前に棄教して、今は夫と同じ讃岐の西方寺の檀家になっているという申し開きをするのですが、結局、それは十分に認められずに、京都の町預けという形で処理されております。

このように、不慶に関係するところで一族の者がたびたび詮索を受けるという、キリシタンの非常に厳しい状況の一端がわかるのではないかと思います。

討論

【西川】 それでは、これより溝部脩師の司会のもとで討論に入させていただきます。
よろしくお願いいたします。

【溝部】 先ほど3人の先生たちにお聞きしましたがけれども、ばらばらな話だったという印象があるかもしれません。今から1時間のシンポジウムの中で、もう少し考えを絞っていきたいと思います。

まず、私は板東先生に最初に質問をしたいんですけども、キリタン文書みたいなもの、あるいは徳島文書を調べて行って、昔の教会あるいは昔の信者の姿に触れて、見ておられると思うんですね。今のカトリック教会をこういう形で見ておられて、昔のカトリック教会と今の教会と、こういう関連をどういうふうにお感じになりましたか。

あるいは、どういう形でこの文書を発見して行って、昔の教会に何を感じたか、そして今の教会をどういうふうにとらえているか、少し難しい質問ですけども、一言でおっしゃってくださったらうれしいなと思います。

【板東】 先ほどの古文書の関係に戻りますが、祐賀の娘さんの飛めという人と、もう1人、寿満という方がいらっしゃるんですが、その方は豊前、大分の中津藩の方だと思うんですけども、西山図書という方と結婚されるんですね。それは公儀のほうでも把握していました。その方のところへ豊嶋五郎右衛門夫婦もまた頼るといふか、行っているんですね。ある意味では、一緒に生活しているようなところがございます。

また、分右衛門という方が祐賀の子どもにおりましたけれども、その人だと思うんですが、資料の中で宗徳という方が出てまいります。この方も豊嶋五郎右衛門のところへ行きまして、そこで2年間一緒に生活をしながら、また、そこで教会のような組織を持っていたといふふうな記述もあるんですけども、そこで一緒に生活しております。

そういったことを考えてみましたときに、当時の人たち、これは決して血縁関係の問題だけではないと思うのですが、ともに生活をしていくという、ある意味では共同体的な意識が非常に強かったのではないだろうかと思っております。

藩のほうの資料からは詳しい内容はわからず、動向を把握するという形でとらえられているんですけども、しかし、ともに生活していることから見ますと、やはり何らかの助け合い的なものが強くあったのではないだろうかと思われまます。だから豊嶋五郎右衛門夫婦は、西山図書夫婦のいる中津藩まで行ったのではないかと思います。

そういうことを考えたときに、今のカトリック教会の連帯的、扶助的などいいますよ、それがどうなのか。ちょっとそのあたり、私はわからないもので、受け答えはできないんですが、多分、信仰が同じでありますので、根差しているものはおそら

く同じであろうと思います。それがだんだん広がっていくことを期待するという状況であります。

【溝部】 先ほどの川村神父さんの話では、昔のキリシタン時代の教会というのは、今私たちが考えている教会と大分違いがあるということ。司祭不在の中で、共同体意識が日本の中によくある形で存在し得た。だから、おそらく阿波の地にも組といったもの、あるいは組の代表みたいなものを通して、信徒のグループが形成されていたのではないかなということをお私たちに思わせているわけです。

これが、キリシタン時代の400年前だと考えていたんですけれども、400年前のカトリック教会と今のカトリックは違わないんだよ、同じなんだよということの理解が多分なくて、昔は昔、歴史の時代だととらえている面があるのではないかなと。板東先生方のこういう研究を通して、昔の時代ではない、今の時代なんだということをお私たちにわからせてくれているのではないかなと。その意味では、非常に感謝したいと思います。

今度は、結城神父さんをお願いしたいんですけれども、先ほどの結城神父の霊性というテーマをもう少し伸ばしていくために、まず、どうして結城という名前をとったのか、どこに魅力を感じたのか、おっしゃってください。

【結城】 どうして。けんかの結果でした。私が30年前に帰化したとき、法務局に行って手続も終って、今度は名前を変えなければならぬと言われて、私は困りました。今、私はいろいろな本を出していますので、別の名前になると、人がわからなくなります。済みません、ちょっと考えますと言いました。

まずディオゴ、これは霊名ですから使えない。ところが、キリシタン時代にはその名前を持っていた人が多くいて、そして漢字であらわしていたんです。ディオゴ、いろいろな書き方があります。了悟、それで名前を残そうと思いました。また今度は、家の名前、私と同じ名前を持っていた人が殉教者の中にあるかどうか、殉教者の名簿などを調べてみると、いろいろありました。その中に結城了悟、了雪の名前がありました。幸い、彼について既にチースリック神父が研究して、書いていました。ですから、その名前を選びました。それだけです。

あのときは、列福のことなど全然考えていませんでした。自分の列福ではなくて、相手がいるんですから。けれども、3年後、里脇枢機卿に列福のための名簿を出すため、私にも選んでくださいと委員会から頼まれました。そのとき、私は喜んで、結城了雪も上げました。今、彼を列福することに教皇様の賛成があったのは非常にうれしいことです。

【溝部】 実際、結城了雪に一番引かれた点はどこですか。

【結城】 この人格。信仰によって照らされた人格です。彼は足利家のメンバーですから、日本で見ると、家庭で受けた教育は高いでしょう。けれども、日本人の特色と同時に信仰が与えること、その両方をあわせてすぐれた人間になったと思います。信

仰は人間の力を弱くさせることではありません。一人一人が自分の性格で、ときにはぶつかるかもしれないけれども、その道を。例えば、使徒のペトロとヨハネは全く違う性格でした。けれども、イエズス様の教えのもとにそれを磨いていきました。結城了雪は、そういう意味で代表的な人だと思います。

【溝部】 結局、神父さんが言われたのは、結城了雪は日本人として、それから国際人として、カトリック性、普遍性というものを理解した上でキリストという方に出会った。これを通して彼の人格が作り上げられていった。この点にあるのではないかなと思うわけです。

今のカトリック教会に問題点があるとしたら、日本的なもの、まだ何かキリスト教は外国の宗教という視点からなかなか抜け切れない。だから、キリスト教とかカトリック教会というと、外国から来た宗教という印象から抜け切れないし、何となく日本人としても居座りが悪いという状況があるのではないかなと。

こういう点にぐさっと入ってきているのが、川村神父さんの学問ではないかなという気がします。川村神父さんは大分県、豊後の土地にある浄土真宗とカトリックの組という問題を取り上げて、論文を書かれております。

川村神父さん、よろしいですか。

【川村】 私は4年前に1つの本を出しまして、これは博士論文を直したものです。私がキリシタン史を勉強しながらその論文を書き、学位をとったのは、実はアメリカでした。そのときに1つの国際学会に呼ばれて行ったんですけども、そのとき私は一生懸命、キリスト教の組織の話ばかりをしていました。キリシタン時代にはこんな組織がありましたと。ところが、参加していたアメリカ人の先生から、日本に同じようなことはなかったのか、日本にも宗教運動というのがあったらう、なかったのかと言われたんですね。

そのとき初めて、私はもうちょっと勉強しなければいけないと思ひまして、そして宣教師の文章を一生懸命に読んでおりました。そうすると、おもしろいことに、宣教師の報告書というのは非常に詳しく書いてあるんですね。

府内、今の豊後大分県から、4キロから8キロ先の村々に信者ができて、そこを往復している信徒たちがいたと書いてあるんです。場所は書いてありません。この4キロ先ってどこだろうとコンパスを使って円を書きながら、目ぼしいところはないかと思って、見ていました。そうしたら、大分県に鶴崎というところがあるんですね、ご存じではないと思いますが。その鶴崎というところが、まさにどんぴしゃのところだったんです。

そのあたりの村々には隠れキリシタンがいて、殉教者も70人ほど出ているところなんです。ああ、この地域だろう、この地域以外に考えられないと思って一生懸命に見て、では、その土地がキリシタンを受け入れるまで、どんな宗教を盛んに行っていたかということ調べたんですね。

そうすると、その村の惣村、つまり寄せ集めの村の真ん中に道場がありました。今でもあります。浄土真宗の寺ですけれども、それが道場として15世紀の終わりから機能していたんです。そう見ると、キリスト教と浄土真宗の共同体というのは重なっているのではないかと。実際に後々の記録を読んでも、浄土真宗からたくさんのキリシタン改宗者が生まれていると書いてあります。

おもしろいなと思って、そのあたりを見ていきますと、村人が何を求めていたか、どんな形の宗教を求めていたかがはっきりとわかってきました。これは偶然でしたけれども、いろいろ見てみますと、やはり同じような信仰形態、同じように1つの神、1つの仏に対して祈る気持ちに共通するものがあったということを見ました。

その後、いろいろな地域を見てみたのですが、浄土真宗の地帯には、いつもキリシタンが隣接してある。これは、まだはっきりとはわかりませんが、そういうことを考え始めたときに、何か16世紀の信仰の形みたいなものがだんだん見えてきたなと私自身は思っているんです。

【溝部】 今の発言で、1つ大事な点があったと思います。川村神父さんが訪ねていて、どうしてキリシタンがそこに生まれたかという土壌を調べたとき、その土地の人が求めているものとキリスト教が合っていたということですね。

時々、私たちの視点というのは、自分のものを持ってきて、そして教えをとという態度を持つことが多いのではないかなと。その土地の人が持っているもの、そして何を求めているのかを理解する、そういう視点が大事なのではないかなということをおっしゃっていると思います。

特に、四国のような仏教の非常に盛んなところでは、仏教の世界の中で生きている人たちの願い、祈り、これらをよくわからないといけないのではないかなと、ちょっとお説教めいた話になりますが、そんな感じがします。

今話された大分のことですが、私は大分県の出身でして、その近くの坂ノ市というところに私の姉が嫁いでいます。そこは昔、寛文年間の1660年代に豊後崩れというのがあって、660人ぐらいが全部捕まって、流されているんです。その中には、残された人たちの村意識というのがあって、結婚は信者同士だけであるというのが1つの決まりみたいになってしまって、村の中で固まっていた。ほかの人とは交わらないという状況が生まれていたんです。

ですから、昔の教会と今の教会、住んでいる土地と教会、こういう2つの問題提起が出されてきていると思いますけれども、もう少し結城了雪神父に話を絞っていきたいと思います。

結城神父さん、もう少し結城了雪についてご自分が感じている特徴というのを話してくださいませんか。もう1回。

【結城】 彼の一生は1つの線のように見えます。いろいろな状態に置かれていました。セミナリオの生活、マカオに行く、フィリピンに行く、京都でほかの宣教師と

活動する、1人になる。けれども、このすべてのことを乗り越えて、自分の道を行ったわけです。そのためには、ほんとうに意思が強かったのと同時に、自分が望んでいることがはっきりしていた。ですから、実行できるように努めたと同時に、非常に賢明であったので、京都でそれほど長い間活躍して、捕まえられなかったことは珍しいことでした。

そして、彼の殉教と捕えられたことは、いろいろな力が一緒になったと思います。長崎の奉行、大坂の奉行、讃岐の大名、老中たち、みんなが彼の活躍を知って、捕まえようとしていました。そして裏切られて、讃岐に渡って、捕まえられるまで、2カ月ぐらいかかっています。彼は小さな舟で、あるところからあるところへ行って、隠れていました。それを手伝ったのは多分足利家の人で、その名前があったから、いろいろな人が門を開けたのだと思います。けれども、賢明に行う人でなければ、こんなに長く続けることはできなかったと思います。

【溝部】 ありがとうございます。

結城神父さんは、了雪は信徒とのつながりが非常に強かっただろうと。20年間、1人で京都から金沢、佐渡まで、それから瀬戸内海のありとあらゆる港。信徒とのつながり、信頼関係が強かったのではないかなということを私たちに思わせてくれます。同時に、蝦夷、あるいは青森県弘前まで追放された大坂の信者を援助しに、物資を持って駆けつけていく、こういう基本的な姿勢が信者さんたちとの深いつながりをもたらしたのではないかと思わせるわけです。

これらのことを聞きながら、川村神父さん、もしよければ結城神父について補充してくださいませか。

【川村】 私は結城了雪神父様については、あまり詳しくないので言えませんけれども、殉教者ということについて私は非常に感銘を受けるところがあります。

と言いますのは、命をかけて証しするということがあるのだということを示してくれていますね。私たちは誰々さんを信じますとか、神を信じますとか、口では何とでも言えるんですけども、命がけで証しをする、命をとられても大丈夫だよというような生き方を示して下さったということは、やはり小さなことではないと思いますね。

私たちは、殉教者といったらすぐに何か英雄のように感じますけれども、そうではない。私たちだって信仰しているわけです。信仰していない方でも、それを理解することはできると思うのですが、ほんとうにそれを命がけでやったというすさまじさ、大きさを感じます。そこまでして、私たちに何かを残そうとした殉教者の1人である結城了雪神父というのは、やはり私たちは記憶にとどめるべきではないかと感じています。

【溝部】 板東先生、今、信仰の世界みたいな話で、殉教者とか準ずるとか、教会の共同体というような話がされているんですけども、どうお感じになりますか。難し

い質問で申しわけないですが。

【板東】　そうですね。先ほど、了悟神父様のほうから、足利家の援助等もあったのではないだろうかという話があったわけですがけれども、私は、それは大いにあったのではないかというより、それがなければ生きていけなかったのではないかと思っております。

中でも岡藤左衛門、それから勘兵衛。それから、訴えてきた本屋忠三郎という方も、実はともに行動している一面があった方なんですね。だから、やはり訴えたということはあるんでしょうが、それに至るまでには、いろいろな人たちとのつながりがあって、そして、支え合って暮らす中で、一緒に行動できたのであろうと。それが信仰の結びつきをより一層強くしていったのではないか。おそらく、そこに、また理想があったのだらうと考えます。それは、今日でも語りかけることなのではないかなとも考えます。

【溝部】　彼は、誰にも迷惑をかけなかったと言って死んでいくわけです。でも、今聞いてわかってくると、迷惑をかけっぱなしですよ。平島公方の家族全部、祐賀さんをはじめとして、娘婿も、息子も、それから子どもたちも、みんなにすごく迷惑をかけている。最後は、勘兵衛さんのように殉教していくという例も出てくる。でも、誰にも迷惑をかけなかったと言っている。

普通、殉教者が亡くなる前は「イエズス、マリア」とか「神の名は賛美させられたまえ」とか「ラウダーテ・ドミヌム」とか「パライソ」とか「天国」という言葉を言うのですが、結城神父さんは「私は誰にも迷惑をかけなかった」と言って死んだわけですね。非常に考えさせられるなという気がします。

ちょっと私の話をしてもいいでしょうか。私は東北から来ました。東北、仙台では訴人報償制といって、キリシタンであると訴えたらお金がもらえる。訴えられた人は江戸に連れていかれて、拷問を受けて、転ぶとしましょう。転んでも、釈放されないんです。もう1人を訴えないと釈放されない。こうして、もう1人を訴える。その人が江戸に連れてこられて拷問を受けて、また、もう1人を訴える。

すなわち、一人一人が訴えていきながら、信者さん同士、信頼関係があった信者の共同体が、一番怖い共同体になるわけです。あの人を私をいつか、あの人をと。そして、信者同士は信頼が置けない、信者ではない人のほうがまだ信頼が置ける。すなわち、教会共同体を中から打ち崩していってしまう制度が生まれてくるということを知っております。

例えば、神父様でも同じですね。ジョバンニ・バッティスタ・ポワロという神父さんは、拷問を受けてフランシスコ会のバラハ神父さんを訴えるんです。自分は釈放されるんですけども、同じようなことが起こり得る。

そういう中で結城神父さんは「イエス、マリア」とか「パライソ」とか言わないで「誰にも迷惑をかけなかった」と言う意味が少しわかるかなと、司会者が話し過ぎて

すけど、感じさせてくれる問題点です。結城神父さんの高潔さというのが死の最後によく見えるかなという気がします。

結城神父さんの話を持ってきておりますけれども、川村神父さん、もう一度、組についてもう少し話をしてもらってよろしいですか。当時の信者の組織、それが崩されていったとき、教会が崩されていったという問題点がありますが。

【川村】 先ほども溝部司教様がおっしゃいましたように、キリシタン時代の教会というのは、少し私たちと成り立ちを異にしております。と申しますのは、司教が初めて着任をしたのは、ザビエルが日本にやってきましたから50年後なんですね。1人目の司教さんは日本まで到達しなかったんですけれども、1590年代の終わりに初めて、セルケイラという司教さんが来られた。そういう中で、やはり今の教区というものは考えられなかったんだと思います。

イエズス会、宣教会のミッション、あるいはフランシスコ会のミッションが活動している。そんな中に信徒たちは教会共同体をつかっていった。その基礎がコンフラリアだったという話を申し上げたんですけれども、実際に、この組というのは先ほど申し上げましたとおり、指導者がなしでも信徒だけでやっていける自主独立の共同体でした。

これは、実は非常に強い意味を持っております。と申しますのは、その後で迫害が起こったとき、禁教令が出たとき、司祭は全部追い出される、あるいは追放されたときに、どうなりますか。例えば、徳島村のある1つの組がどうなるかということ、全く影響を受けないんですね。それはちょっと言い過ぎですけれども、司祭がいなくても自分たちで共同体をつかっていたわけですから、司祭が訪問してこなくても信徒の共同体は生きるわけです。これが組ですね。

そして、後でマテウス・コーロスという人物が、全国にどれぐらいの信徒がいて、どんな指導者がいるのかリストアップをしたときに、75ぐらいの共同体があった。しかも、信徒が組をちゃんとつくっていた。こういう人たちが後々の潜伏時代になったときに、いわゆる隠れキリシタンになれたのだと思います。

なぜかという、組の組頭さんが大体、村の長を兼ねることが多いんですね、地方三役。そのときに幕府から、あるいは代官からおとがめがあつて、おまえたちの村には何人ぐらいのキリシタンがいるか調べてこいと言ったら、潜伏しているキリシタンであるリーダーは「うちには1人もおりません」と言うことができたんです。そうすれば、その何百人かの村は全く隠れて生活ができた。

したがって、一番初めから組、コンフラリアという発想がだんだん根づいていって、共同体ができた、それが日本独特の潜伏の共同体も兼ねていた、ここが日本の教会の非常に強いところだと私は思っています。その中から、この188人、あるいは結城了雪という人を生むような土壌ができていたと思います。

【溝部】 少し補足ですけれども、ローマで聖年というのがあって、教皇様の手紙が

迫害された日本の教会に回されてくるわけですね。神父さんたちがその教会を回って、教会の代表が署名して、教皇様にありがとうございましたという手紙を書いているんです。1618年ですか、それがそのままローマに残っております。

それを見ますと、その当時、東北から九州まで、四国も同じ、すべてのところにあるんですね。同じように代表がいるんです。四国でしたら、松山は6人か7人、代表の名前が書かれております。四国と中国が一緒になっていますけれども。ですから、当時の信者の代表が誰であるかがわかるわけです。それが、先ほど言った組の代表と見てもいいかなと思うんですね。

もう少し具体的に、「サンタマリアの組」というのを川村神父さん、話してもらってもいいですか。

【川村】 キリシタンの文書の中に、極めて珍しい、日本語で残っている文書が幾つかありまして、その中に組の規則というのが1つ、はっきりと残っております。

ローマのカサナテンセという、ドミニコ会の図書館にあるんですけども、その内容は、イエズス会のコンフラリアには「サンタマリアの組」というのがありまして、どんな人を入会させるべきか、どんな人を入会させてはいけないか、奴隷売買をしてはいけないとか、事細かな規則がちゃんと載っています。収穫のときには貧しい人に助けを与えるのだと。「サンタマリアの御組」というのですが、そういう組が長崎を中心に何百とあったというんですね。

具体的には「サンタマリアの組」とか「ご聖体の組」なんていうのもありまして、皆さん、島原の乱のときに天草四郎が持ち出したという旗のことをご存じですか。実は、あれは「ご聖体の組」のコンフラリアの旗なんです。反乱の旗ではありません。農民たちがこれから農民一揆をするぞといったときに、先祖が残した旗じるしを持ち出したんですね。島原半島、あるいは天草あたりには、そういうコンフラリアの痕跡が非常に多く残っています。

その中の代表的なものが「サンタマリアの御組」、その下にたくさんの支部があったそうなんですけれども、そういう存在も確認されています。したがって、すごいエネルギーだったようですね。村落共同体を存続させるため、そこにキリスト教の信仰が入って、余計に強くしていったという歴史があると思います。

【溝部】 ありがとうございました。

少し、組についておわかりになってきたと思うんですけども、イエズス会だけではなくて、実を言いますと、ドミニコ会は「ロザリオの組」、それからフランシスコ会は「コルドンの組」というのを持っていたんです。ですから、いろいろな修道会がありましたけれども、いずれも、基本的には信者の共同体を中心とした教会づくりを考えていたということははっきり言える。

「コルドンの組」については、フランシスコ会のとても強い影響があって、特に蝦夷から東北地区においては、フランシスコ会の組づくりは殉教者を生み出す土壌とな

っております。

結城神父さん、ふいに質問ですけれども、「コルドンの組」とかフランシスコ会第三会ということはおわかりですか。

【結城】 組とか第三会など、いろいろありました。

【溝部】 フランシスコ会は。

【結城】 フランシスコ会の第三会は、今もありますけれども、大分違います。あのときの第三会というのは、修道会みたいな掟がたくさんありました。例えば、ドミニコ会とアウグスティノ会で列聖された2人の女性がいます。列聖されたとき、ドミニコ会の者として列聖されました。後でアウグスティノ会がそれに反対しましたが、バチカンでは認めました。アウグスティノ会はなぜかという、誓願があるからです。今の第三会には誓願がなく、ただ信心会です。いろいろな祈りをとなえる、集まり、話を聞く。けれども、あの時代、第三会はある程度まで誓願のようなもので会と結ばれていました。資格が違うんです。

後で、ほかのいろいろな組があります。多分、結城了雪とかかわりがあったのは2つです。1つはミゼリコルディア、慈悲の行い。長崎に2回行っていますが、そこに泊まったのはあまり影響がないでしょう。けれども、京都では3回、ミゼリコルディアの組に協力していました。京都の信者がそう書き残しています。

2番目は「聖母の組」、これは3人のイタリア人、福者スピノラ、殉教者ジャンノニとパウロ、この3人の神父はナポリの学校で育てられ、そこで「聖母の組」を始めたパヴォネという神父が彼らに影響を与えました。そして、彼らが日本に来て、有馬のセミナリオで教えるために行き、「聖母の組」をつくりました。生徒のためにです。生徒がローマに送った手紙が残っています。お告げの絵が版画に残っています。スピノラは後に京都で同宿のために「聖母の組」をつくりました。そして、迫害のとき、ジャンノニは有馬で隠れながら「聖母の組」をつくらせて、会則を書きました。その会則が残っていて、『キリシタン研究』に載せられたことがあります。

【溝部】 川村神父さん。

【川村】 今、イエズス会、ドミニコ会、フランシスコ会というのが出てきましたけれども、実はイエズス会のコンフラリアの規則の中に、ドミニコ会とか他のコンフラリアには入ってはいけないという規則があるんですね。逆に、ドミニコ会のほうでも、イエズス会のほうには入ってはいけないと、何かそれを見ていると、だんだん悲しくなってくるんですけれども、やはり、いつも信徒の取り合いをしていたというのは、そのときからあったと思います。

【溝部】 フランシスコ会の「コルドンの組」、コルドンというのは紐ですね。フランシスコ会はスータンを着て、紐を下げています。今は何かアクセサリみたいなになっていますけれども、あれは鞭打ちをするためのものなんですね。だから、フランシスコ会の「サンタマリアの組」みたいに全部残っていませんけれども、『勢数多講定之事』

(セスタ講定めのこと) という1枚の紙が残っているんですね。

そんなのを読んでいきますと、先ほど結城神父さんがおっしゃったみたいに、フランシスコ会の第三会員とか「コルドンの組」というのは、誓願とは言わないけれども、神様への特別な誓いをしているんですね。この人たちが「コルドンの組」の中心人物になって教会を運営している、組の中心人物になっている。親と言われる人たち、東北では談義者とかと呼ばれる人たちです。この人たちを考えないと、例えば江戸の殉教者の原主水とか、あるいは米沢の殉教者の甘糟右衛門なんていう人はわからない。みんな、こういう共同体づくりというのをしていることを私たちにわからせてくれております。

組については、ある程度おわかりになったと思うんですね。当時の教会と今の教会の違いも出てくるのではないかなと。当時の教会の強かった点は、信徒の組織がかなりしっかりしていたということを私たちに考えさせてくれております。

もう、時間もそれほどありませんけれども、もう一度、板東先生。

今、徳島にいるんですけども、徳島で蜂須賀家とキリスト教、徳島とキリスト教、あるいは蜂須賀家にとってキリスト教というのは、あるいは徳島にとってキリスト教というのは迷惑だったでしょうか。

【板東】 結論から言うと、おそらくそうだと思いますね。というより、これは徳島だけの問題ではなくて、キリシタン問題というのは、藩の一存でどうこうできる問題ではないんですね。よく、幕藩制国家の三大原則ということと言われるんですが、石高制、身分制、鎖国制というんですけども、その中で鎖国制というのは、公儀のもう1つ上の大公儀権ですね、いわゆる幕府専決事項とも言うべき事柄でありまして、それに異議を唱えるとか、それをしないということは絶対にできないわけです。

ですから、鎖国制の要素であるキリシタン問題は、資料を見るとよくわかりますが、ほとんどの場合、幕府宗門奉行の要である井上筑後守から命令が下ってきて、最終的には筑後守に結果が報告されるという、極めてトップダウン的な形で処理されている。だから、ことの理非に関係なく、この問題は処理していかなければならない。ある意味で、藩にとっては非常に厄介なことではなかったかと思えます。

それを証明するような資料を『荒井家文書』から紹介しますと、例えば荒井門内は不慶の一件について「此度之一儀は外事とは違い、兎角、御公儀様へ御申し分これ無く候ては埒あき不申候」と、幕府が納得することが重要なのだと述べています。このことは藩の考えで処理できる問題ではなく、幕府の命に沿って処理しなければ藩の存亡にもかかわる重大事であるという危機意識が、ここによくあらわれていると思えます。この考え方は、幕藩体制下におけるキリシタン禁制の意義を考える上で、非常に重要だと言えます。

多くの研究者がこの視点でキリシタン禁制史を見ていますが、私も同様に、この視点で見ております。ですから、藩にとってキリシタンというのは非常に迷惑な話だったと思われる。

【溝部】 先日、大阪でカトリックの神父さんたちの研修会で話をしたんですけれども、その中で結城神父が殉教した場所がわからないかということを知りたくて、それは大阪のあなた方がやることではないんですかと逆に質問をしたんです。こういうふうに、板東先生とか谷本さん、三木さんとかを通して、いろいろなことがわかってくる。

例えば、今、香川県の高松で石原孫右衛門という殉教者の碑を建てたんですけれども、やはり高松の郷土史家とか、高松の歴史をしっかりと踏まえていないと、石原孫右衛門というのも風貌がつかめないということになるのではないかなど。

同じように、松山にも殉教者がいることがわかっていますし、加藤嘉明の時代には家臣が1618年の回答書に書いています。奉答文に署名をしていますし、加藤嘉明が東北の会津に移ったとき、この家臣も移って行って、会津での殉教者は、みんな松山出身の人たちだということとかがわかってくるわけですね。少しずつそういうことを考えて、四国の中でキリシタン時代というのを見ていけば、我々とキリシタン時代がとても密接につながるということが理解できるのではないかなど。それが、今回の資料の裏りであればいいなど、ほんとうに思っております。

最後ですけれども、川村神父さん、今はインカルチュレーションとか、文化適応とか、その他のことが言われております。キリスト教は、どこかバタくさい、日本人の生活とか離れた、どうも近づきにくい、行っても難しいことばかりを言っているとか、あるいは外国人に頼っているという印象がまだまだ強いと思うんですけれども、これについてどうお考えですか。

【川村】 インカルチュレーションという、ちょっと難しい言葉なんですけれども、日本語に訳しますと、文化内開花とか、文化受肉なんていう言い方をしますね。これは、社会学者の言葉を使うと、結局、よそから入ってきた種が日本の土壌にまかれたとき、日本の土壌の影響を受けて、日本的な花が咲きますよね。例えば、私たちが日本で育った桜をワシントンに持っていったら、日本とは全く違う咲き方をします。もっと豪華です。やっぱり土地の影響、土地の気候を受けた植物が、同じ苗でも違う花を咲かせます。

それと同じことで、キリスト教という種が例えば徳島にまかれたときに、徳島的な花が咲かないと、本当ではないんですね。まいてみたらヨーロッパと同じ花が咲いたというのは、変なわけです。何か農薬を使ったとか、人工的な操作を加えない限り、そんなことは起こり得ません。とすれば、同じヨーロッパから学んだキリスト教でも、やはり違う花が咲いているでしょう、その違う花を大切にしましょうというのがインカルチュレーションの基本的な点だと思うんですね。

私たちはバタくさいとか、西洋的だとか思っていますけれども、とんでもない、ヨーロッパで生活した経験がありますと、日本のキリスト教は非常に日本的です。極めて日本的で、ヨーロッパの人が同じキリスト教かと思うぐらい違います。自然にそうなっています。そういうところは、やはり私たちは人工の操作をせずに、私たちの学んだことをこの文化の中でどういうふうに生きるかということ素直に考えると、自然にインカルチュレーション

ョンが実現していくと思います。

よそから見ると、ああ、日本的だと言われます。ただし、もう少し自発的にしようと思ったら、やはり日本的な何か創造が必要ですね。オリジナリティー、何か日本の創造を加えなければなりません。同じような花を咲かせながら、今度は接ぎ木をして、違う種類ができたなら、これは創造です。その点、私たちは少し努力を怠っているのではないかなと思っています。

ただ、インカルチュレーションというものの一番初めの土台は、みんなが怖い顔をして、目をつり上げて、日本的なものを追い求めることではなくて、自然に受け入れたときに初めて何かが起こるものです。その後で、私たちは創造、何かプラスアルファをつけていくべきでしょう。

そのとき、ローマからは、何だ、日本は勝手なことをやっていると怒られるかもしれませんが、それはそれなりに自然にできたことでしたら、それは本物だと思います。そんなことを私たちは考えていく必要があるのではないかなと考えています。

【溝部】 つけ足しですけれども、昨年、ポストコンGRESS・イン・高松という形で、宗教者の集まりを行いました。仏教と諸宗教、キリスト教、神道、それから宗教家が集まって、それから後、フォローアップという形で3カ月に1回ずつ集まって、平和へのシンポジウムの準備をしております。

なぜか私が会長に選挙されて、私が責任をとっているんですけども、そのときの記録を入り口のところで売っておりますので、よろしければお買い求めになって、帰って読んでくださいますか。こういう動きが四国の中にもあるんですよということをおわかりになってくださればいいかなと思います。

結城神父さん、神父さんは日本に帰化したんですけども、生まれは外国で、日本に宣教に来たわけですね。インカルチュレーション、日本の文化に適應するというのを川村神父さんがおっしゃったんですが、外国人の立場からはどう話されますか。外国人というのは失礼ですけども。

【結城】 インカルチュレーションについて、いつも議論があります。複雑な問題ですから、どんな言葉でそれをあらわすのか。今の教皇様は、前の教皇様と違う言葉を使います。

インカルチュレーションには2つの面があると思います。1つは、自分の文化を知る、文化を大切にすること。2番目は、相手の文化を理解する、そして、そこから文化交流になる。一方が与えて、一方が受けるだけではありません。両方が与えて、両方が受けなければなりません。そして、それは一日でできることではありませんし、命令によってでもありません。生活において、それを使っていく。

例えば、外国から来て、日本の茶道を見ます。ある人には全然、理解できません。どこに魅力があるのか。しかし、時間をかけて、その式にあずかったら、意味がわかります。その価値を理解するようになります。そして、その精神をお茶のためではなく、ほかの活躍に生かすことができます。

例えば、人と人の出会いです。人と出会い、相手を大切にいくことができれば、それはインカルチュレーションになります。その人の生活を大切に思い、ともに喜んで生きることができます。1人のイエズス会のブラザーがブラジルのアマゾン川の奥地で、インディオの村に入って村人と一緒に生活していました。そして、非常にいいものをそこで見つけて、見捨てられている彼らのためにいいことをすることができました。人間の出会いは大切です。ただ、本の記録を見てでは、これはできません。一緒に生活をする事です。

【溝部】 どうもありがとうございました。

私たちにはあと4分残されておりますので、最後に、パネリストに一言ずつ今日の感想を述べていただいて終りたいと思います。

板東先生の方からお願いいたします。今日は何を感じになられましたか。

【板東】 今までと、まるで違う文化に接した気がいたします。

最後に私的な言葉で言えば、アウフヘーベン（止揚）的な形、非常に考えさせられました。これから自分との対話というか、それをしっかりと見ていきたいと思っています。

【溝部】 結城神父さん、一言だけどうぞ。

【結城】 私は、結城了雪について話しました。1つのお願いをしたいと思います。

彼の妹、祐賀についてももう少し研究があれば、すばらしい人間的な研究になると思います。祐賀は3歳のときに公家の家に入りましたが、あのころの、天皇陛下に仕える日本の文化は最高でした。13歳で公方と結婚しました。幸せな生活が始まり、数人の子どもに恵まれます。けれども、後で政治的な理由で、苦しむようになります。1人の跡継ぎは大切、ほかの息子、娘は、結婚した人を除いて、お寺に預けられました。だんだん寂しくなりました。大切にしていた兄弟も殺されました。そして晩年には、キリシタンにとって一番強い敵、井上筑後守のもとでの裁きがありました。そして、それらすべてを静かに耐えて、自分の道を進みました。この弱い、優しい、同時に強い女性について研究があれば非常にいいと思います。

【溝部】 ありがとうございました。

川村先生、最後をお願いします。

【川村】 今日はこんなにたくさんの人にお集まりいただいて、四国のカトリック教会のパワーを感じました。結城了雪神父列福の機会に、何か新しい動きが始まったらなという思いを非常に強く抱きました。

さっきも言いましたように、殉教者というのは命をかけて証したという私たちの先人ですから、この方からいろいろなことを学んでいただいて、この四国にまた何か大きな動きが生じることをお祈りしながら、これで終わりたいと思います。

【参加者】 司教、よろしいでしょうか。手短にお願いしたいと思います。

【溝部】 はい。手短にお願いします。

【参加者】 私たちは京都から参りました。大変すばらしいシンポジウムで、ほんとうによかったと思っています。

最後にお尋ね申し上げますが、今日のテーマの結城了雪もさることながら、今度の188名の中にはペトロ岐部神父、それからトマス金鍔次兵衛神父、ジュリアン中浦神父、それからイルマンのニコラオですね、こういった方。しようもない質問かも知れませんが、穴吊りの刑で最後を遂げておられるわけですね。二晩も三晩も四晩も逆さ吊りになって亡くなっているという、殉教でも壮絶な姿が描かれております。私たち京都の52名の殉教者は火あぶりだったんですけれども、その辺のところ、聖職者は穴吊りでありましたから、聖職者には時代的なそういうものがあつたんでしょうか。ちょっとその辺だけ、わかりましたら。

【溝部】 申しわけないんですけれども、私たちには時間が限られておりまして、穴吊るしの刑については何かの本を紹介させていただきますか。穴吊るしの刑は「拷問史」というあれに載っていると思いますので、後ほど個人的に。

これで私たちのシンポジウムを終わりますけれども、入り口のところに昨日の徳島新聞があって、板東先生の記事がそこに載っております。徳島県の人のご遠慮いただいて、徳島県以外の方はご自由にお持ち帰りください。

それから、188名の殉教者については『キリシタン地図を歩く』という本がありますので、歴史の話はしましたけれども、まとまったものはありませんから、それをお読みになってくださればいいかなと、お買い求めになれると思います。

それから、三木さんと谷本さんというお二人の郷土史家の本もそこに置いてありますので、よろしければお買い求めください。

今の京都の方、申しわけないんですけれども、後ほど私にお手紙をくだされば、本の紹介をいたしますので、これで終らせていただきたいと思います。後日にいたしましょうか。

それでは、これで私たちのシンポジウムを終わらせていただきます。

ありがとうございました。

【西川】 講師の先生方をはじめ、司会、どうもお疲れさまでございました。もう一度、大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

お礼の言葉

実行委員長 メリー・ギリス

【西川】 皆様のご協力によりまして、すべてスムーズに済ませることができました。感謝します。

これより、実行委員会を代表いたしまして、シスター・メリー・ギリスがお礼の言葉を申し上げます。

【ギリス】 皆さん、こんにちは。

今年の2月9日、阿南市で第1回目の実行委員会を開いて以来、今日の行事の準備をしてきました。その間、数多くの方のご支援と励ましのおかげで今日を迎えることができたことを心から感謝しております。

また、大変お忙しい中、パネリストとして、または合唱のメンバーとして出場して下さった方々に御礼申し上げます。

16世紀の教会音楽の美しい響きに包まれて、パネリストの発表とシンポジウムを通して、殉教者ディオゴ結城了雪神父が生きた世界がより近くなったのではないかと思っております。また、溝部司教様がよく私たちにおっしゃるように、それは単に歴史にあったことだけではなく、現代に生きる私たちにとって大切なメッセージでもあることです。

最後に、このように集まって下さった皆様に感謝申し上げます。三連休の第一日目をこの行事のために捧げて下さった皆様にとって、有意義な一日であったことを心から願っております。

お帰りの無事を心から祈りながら、御礼の言葉とさせていただきます。ほんとうにありがとうございました。(拍手)

(終了)